草水町二丁目窯跡　秋葉区草水町二丁目

窯跡は新津丘陵東側の北東斜面に所在する。東約三〇〇メートルには、能代川が南東から北西方向に流れている。平成五（一九九三）年、宅地造成工事に伴い新津市教育委員会が約五〇〇〇平方メートルを発掘調査した。

調査地は北側と南側の斜面に大別される。北側の北東方向の緩斜面からは土師器の焼成窯が十数基、木炭窯（焼土坑）が一〇基、掘立柱建物跡が数棟と、竪穴住居跡などが検出された。南側は南東方向の急斜面で、須恵器窯が一基と、粘土採掘坑などが検出された。遺物は土師器焼成窯や、須恵器窯の灰原（捨て場）から多量に出土し、平箱で五〇〇箱以上である。窯の操業時期は、須恵器窯が八世紀中葉から九世紀中葉の約一〇〇年間、土師器窯が九世紀後葉から十世紀が中心と考えられる。

図36　窯跡の位置　2万5000分1地形図「新津」

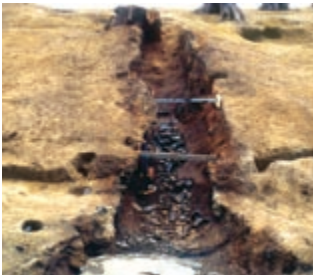
図37　須恵器窯　天井が失われている

土師器焼成窯は、平面が一・五～三メートルほどの不整な隅丸方形や円形で、深さ一〇～四〇センチメートルの土坑である。上部が開放し、酸素が供給される酸化焔焼成のため、壁面や床面は赤く酸化していた。遺構内や周辺からは多量の土師器無台埦が出土した。中には、窯の

中に並べられたように残されたものもあり、焼成時の状態で遺棄されたものと考えられる。

須恵器窯は、全長六・五メートル、最大幅一メートル、確認面からの深さ一メートルの半地下式の窖窯である。壁面には三回程度の修復の跡が見られ、繰り返し使われたことが分かる。灰原からは、坏・高坏などの食膳具や、壺・甕・横瓶などの貯蔵具が大量に出土した。酸素が供給されない還元焔焼成が基本だが、失敗作とみられる酸化焔焼成の遺物も見つかった。主な製品は食膳具であるが、特殊なものとして、円面硯・鳥形陶製品などがある。

図38　出土した須恵器　上,坏　右下,横瓶　左下，短頸壺

新津丘陵の東側斜面は、以前から須恵器の窯跡が多く存在する所として知られていた。昭和二十七（一九五二）年発行の『新津市誌』には、大字田家字山崎・中山・滝谷・銭瓶沢の間には一八か所もの窯跡があると書かれているが、これまで発掘調査されたのは昭和二十九年発掘の七本松窯跡だけであった。充分な調査がされないまま開発が進んだため、新津丘陵の窯跡群の全容は明らかでない。しかし、新津丘陵産の須恵器が蒲原郡内で広く出土していることから、大規模な窯跡群であったと考えられる。